中国民間故事から見た回族服飾の特色

Some Characteristics of the Huis' Ethnic
Clothing and Adornment represerted by Chinese Folktales

胡　　軍*　　相　良　英　輔**
HU JUN　　Eisuke SAGARA

要　旨

中国には55もの少数民族がいる。回族はそのうちの１民族であり、イスラム教を信じ、元の時代から形成された民族である。回族には自分の言語と文字がない。漢語が回族の共通語である。従って服装も漢族伝統文化の強い影響を受けている。しかし多少は回族の持っていた民族的特色を残している。それは民族民間故事を通して知ることができる。本稿は４つの回族民間故事を通して、回族の服飾について民族的特色を分析したものである。

キーワード

Clothing and Adornment（服飾）、The Ethnic Huis（回族）、Folktales（民間故事）、Folklore（風俗）、Religion（宗教）

１．はじめに

服飾には人体防護と身体装飾という二つの役割がある。本稿は回族の服飾について論ずることを意図するものではなく、民話の中に出てくる回族の服飾についてその特色を見出すことを目的としている。現在、中国において回族の民俗風習を研究している学者は何人かいる。しかし、回族民間故事から服飾の特色を研究する人はほとんどいない①。

回族民俗の研究範囲は広い。一つは、経済民俗と言われ、回族の伝統的な農業生産に関する民俗風習、商業に関する民俗風習、消費に関する民俗風習、飲食に関する民俗風習、服飾に関する民俗風習などを含む。二つは、社会民俗と言われ、回族民間の礼儀民俗風習、言語民俗風習、婚姻民俗風習、葬式民俗風習、衛生民俗風習、姓氏民俗風習などを含む。三つは、信仰民俗と言われ、禁忌民俗風習、信仰民俗風習、祝日民俗風習などを含む。四つは、娯楽民俗と言われ、回族伝統工芸美術民俗、体育民俗（武術）などを含む。この四類型の研究をすすめると、さらに回族及び回族の伝統文化が理解できると思う。

中国における回族の総人口は900万人、55少数民族のうち第三番目に多い民族である。回族の全国での分布の特徴は大分散、小集中である。全国において、ほとんどの地域に分布しているので、「回族は天下にあまねし」という諺もある。回族は純粋な外来民族ではなく、また、中国の昔からの土着民族でもない、イスラム文化によってできた民族だと言える。七世紀の唐

* 北京市中央民大学外国語系　　** 島根大学教育学部社会科教育研究室

代の中国は大変栄えた国であった。日本の遣唐使と同じ時代に西アジア及びアラブ地域から大勢の商人、使者、軍人、それに旅行者が中国にやって来た。彼らはイスラム教徒であった。彼らはペルシャ湾などの港を出て、海上のルートを使って中国の広州や泉州に来港し、あるいはシルクロードとして有名な中央アジア砂漠や甘粛の河西回廊を通って長安に入って来た。彼らはイスラム教をもたらした。歴史的には「蕃客」[2] という。これが回族の発端である。

十三世紀にモンゴル人は西方への大戦争を起こした[3]。その時代、民族の移動は激しかった。西アジアと中央アジアの多くのイスラム教徒がモンゴル軍によって中国に連れて来られた。その時から、彼らは「回回」と呼ばれていた。元の末から明の初めに、更に多くのイスラム教徒が中国にやって来た。彼らは東へ来た時、独身の人が多かったので、必ず地元の女性と結婚し、特に漢民族の女性と結婚したことが多かったという。これは回族の族源説話に語り伝えられている。

回族は多民族国家中国における一民族である。しかし、回族には自分の言語と文字がない。漢語が回族の共通語である。従って服装も言葉もほとど漢化されたと言う人もいる。しかし、人間の精神は不思議なほど強いもので、イスラム信仰の綱をつかむ回族は滅亡しなかったばかりでなく、現在の中国においても存在のきわ立つ民族なのである。

中国大地に生活している回族は、少数民族の中では比較的人口の多い民族である。そして、漢族の伝統文化の深い影響を受けながら、同時にイスラム教を精神的支えとする民族である。その風俗習慣はイスラム教の深い影響を受けた。しかし、都市と農村、沿海と内陸地、そして貧富の差など、人文的、地理的環境などの要素によって、風俗習慣は多少異なっている。　回族は通常漢語を使うが、日常生活と宗教生活の中で一部分アラビア語、ペルシャ語の単語を使っている。回族の人には漢族の名前と宗教の名前がある。主食は、主に牛、羊、鶏、魚である。豚肉と馬、犬肉は禁食である。又動物の血と死んだ動物の肉は口にしない。回族には飲茶習慣もある。

回族の服飾は漢民族と共通のところと異なるところがある。田舎に住む成人女性はスカーフあるいは白い帽子をかぶる。男性も白い帽子とかターバンをかぶり[4]、長い髭を伸す。これは漢族と著しく違っているところである。しかし、都市では一部の老人のみ回族の服飾をしている。

このような服飾は回族民間故事の中にも記述された。以下、本稿ではいまだ翻訳されていない「纏河の物語」とすでに一部紹介したことのある「ワンガースの物語」[5]、「回族と漢族は昔から親戚だ」[6] の三つの民間故事をとりあげ、これら回族民間故事の中の服飾の特徴をみていきたい。

2.「纏河の物語」

河南の洛陽府[7] の東に河が流れており、河の名前を纏河といい、纏河の両岸には多くの回族が住んでいる。この河はなぜ纏河というのか？纏河の両岸にはなぜこんな多くの回族が住んでいるのか？。ここにはひとつの伝説がある。

元朝年間、チンギス・ハーンは西征の後、再度金朝[8] に攻め込み、その際一軍を防衛のため洛陽府に駐屯させた。彼らは理由もなく、殺人放火、強姦強奪を働き、賑やかであった古い町

は無残なほどに壊されてしまった。しかしこの軍の中には西域の兵がいて、彼らはただ勇敢によく戦うばかりでなく、厳格に戒律を守り、軍紀が厳正である。飲食や言行は他の元兵とは異なり、格別に人目についた。

兵営に、ある若い伍長がいて、名をアブドゥーといった。彼は武芸に秀でており、機敏で勇敢で、正直で善良な西域の人だった。彼は官軍の兵士が勝手気ままに漢族を抑圧、暴行するのに対してとても不満を感じていた。

ある日、アブドゥーが隊に随い野外訓練から帰ってくると、運悪いことに、彼の軍馬は馬蹄を負傷して人を乗せることができなくなってしまったので、彼は徒歩で後を追って帰るしかなかった。歩きに歩いて、郊外のある村を通り過ぎようとした時、突然道の側のある人家から女性の凄惨な叫び声が聞こえてきた。アブドゥーはそれを聞きつけると、即座に刀を持って中へ駆け込んだ。そこではなんとひとりの兵がまさに娘を乱暴しようとしており、アブドゥーは凄まじい叫び声をあげて刀を振り上げていた。その兵も大声でどなり刀を振り上げ飛びかかってきた。何度か互いに刀を交え、その後、アブドゥーはその兵を突き殺した。その時、娘の父親がちょうど柴刈りから帰ってきて、この光景を目にし、非常にアブドゥーに感謝した。

アブドゥーは父子に早くよその土地へ一時逃げるように忠告した。言い終えると彼自身も木々の生い茂る山へと逃げて行った。

予想通り、官軍は殺されたその兵をすぐに発見し、彼らは火を放ち農民家屋を焼き払って、至る所で懸賞を掛けてアブドゥーを逮捕しようした。

折り良く、アブドゥーと父娘は　山の森林の中で思いがけず再び出会った。老人は彼をある洞穴の中まで連れて行き、そこで彼を匿った。その洞穴は彼らが以前薬草を採取している時に発見したもので、よそ者は知らない洞穴だった。老人とその娘姻姻は山の麓の親戚の家に住んだ。

老人は数日毎にアブドゥーに食事を運んだ。ある日、姻姻は「お父さん、あなたはもう年老いており、この道は遠く険しくでこぼこしているので、やはり私が運びましょう」と言った。老人は「それもいいが、ただお前は女だ」と言った。

姻姻は「私にいい考えがある」と言って、すぐ柴刈りの若者に扮した。老人は彼女のこの利口さを見て安心した。それからは雨の日も風の日も、姻姻は険しい道のりをいつも時間どおりに食事をアブドゥーに運んだ。そしてすぐ数ケ月の時が過ぎ、官軍もアブドゥーのことをあまり気にしなくなり、アブドゥーと姻姻の間にも次第に相想う感情が芽生え始めた。アブドゥーは姻姻が聡明で美しいだけでなく、勤勉で善良な女性だと思った。姻姻はアブドゥーのことを鼻筋が通っており、彫りが深く、金色の髪で、異郷の人らしいが、勇敢で凛々しく、性根の優しい男性だと思った。ある日、食事を運んだ時、姻姻は恥ずかしそうにアブドゥーに「危険はすぎ去ったのだから、あなたはいつまでも洞穴の中に住んでいる必要はない。あなたの家は何処？。これからどうするつもり？」と尋ねた。アブドゥーはため息をフッとついて、「私の家はここからとても遠い。帰りたくても帰れない。アラーの思し召しに託して、私はここに身を寄せたいが、私のところとは習慣が違う」と言った。姻姻は「あなたはここで家庭を持てばいい。何かあったら、私たちがあなたの言う通りすればいい」と言った。

こうして、アブドゥーと姻姻は山の麓で結婚した。アブドゥーは田畑を耕し柴を刈り、姻姻

は家で食事を作り、更にアブドウーの仕事を助けて、若い夫婦は年老いた父親によく仕えた。暫くして、姻姻が男の子を産み、一家は幸せな日々を送った。

ある年、この地方はかつてない未曾有の大旱魃に見舞われた。作物は枯れ、人も家畜もまたたく間に飲む水がなくなってしまった。アブドウーと村人達は一緒になって四方八方で水を探し、三日三晩探したが、一滴の水も探し出せななった。その後、アブドウーは自分がかつて隠れていた洞穴へやってきて、その地勢を見て「ここには必ず水がある。我々はここから深く井戸を掘り、水を引き出そう」と言った。村人達は「この辺では井戸掘りをしたことがない」と言ったが、アブドウーは「大丈夫、私がやったことがある」と答えた。そこでアブドウー自ら井戸掘りに着手した。彼が下で地面を掘り、村人達に上からかごで土をあげさせた。七日七晩掘りつづけた時、土は湿ってきて、今にも水が出てきそうになった。すると突然井戸の下で「ドーン」という大きな音が聞こえた。村人達はすぐにかごを引き上げたが、そこにアブドウーの姿は見えず、ただ彼が頭に巻いていた布（ターバン）だけが籠の中にあった。姻姻はこの光景を見て、悲痛のあまり気が狂いそうになり、井戸の中に飛び込もうとした。村人達は慌てて彼女を引き止めた。姻姻は巻き布を手につかみ激しく泣き叫んだ。その白い巻き布の一方は井戸の中に垂れ、もう一方は地面に垂れており、彼女の涙がポタッと巻き布の上に落ちた。すると突然姻姻の涙にしたがって、その巻き布は一筋の清泉と変わり、井戸の中から水が溢れてきて、この清泉の流れは止まることなく、山から洛陽府へと流れていき、更にクネクネと曲がる白い巻き帯のように遠い遠いところへと流れていった。水が見つかったお陰で、作物は生き返り、家畜も村人達も救われた。しかしアブドウーは二度とあがってくることはなかった。

人々はアブドウーを記念して、この河を纏河と呼ぶようになり、その両岸の人々もみなアブドウーの風俗習慣に従うようになった。これが我々洛陽回族の起源である。

3.「ワンガースの物語」

ある夜、唐王は夢の中で宮殿の大梁が崩れ落ちてきて、今にも彼の頭に落ちてきそうになるのを目の当たりにした。その時ある男が大梁を支えているのを見た。この男は緑色の長衣に身を包み、頭を白い布で覆い、肩にはタオルを一つ掛け、左手には湯瓶を下げていた。目の彫りが深く、鼻筋が通っており、色黒で、背丈もなかなかのものだった。

次の日、文武百官が参内した際に、唐王は昨夜の夢での出来事を語り、皆に夢を診断さた。徐茂公先生が立ち上がって、「その人は中原の人ではなく、西域の人で、回族と言います。緑色の長衣は身を清めるためのものです。」と答えた。「ならば、回族の方を何人かお招きせよ」と、唐王は言った。それを受けて、徐茂公は「恐らく招くことはできないので、思い切って何か交換で招きましょう」と言った。唐王は「何をもって交換するのか」と尋ねた。徐茂公は「人と人で」と答えた。すると唐王は「よし、そのようにいたせ」と命じた。

徐茂公先生は60人の唐朝の若者を選出し、60人の回族と交換した。その回族のリーダーはガイス、ワイス、ワンガースであった。彼らは唐朝へ行く途中、気候風土に馴染まないため、半分以上のものが帰らぬ人となってしまった。ガイス爺さんは新彊の星星峡で帰らぬ人となり、ワイス爺さんも酒泉の回族の町で帰らぬ人となった。ワンガース爺さんは残った20人を率いてクルバーン祭（犠牲祭）の時、長安にやっと着いた。

ワンガース爺さんの一行が長安に着くと、唐王は自ら宮城の門を出て出迎え、兄弟と呼び合う仲となった。更に「ワンガースが宮城の門を出る時は、如何なる者もそれを妨げてはならない」という命令を下した。ワンガース爺さんと唐王は対等に振る舞い、如何なる者もそれに関して干渉することはできない。唐王はまた敬徳将軍（即ち尉遲恭、唐初頭の大将。西暦626年の玄武の変において李世民が帝位を奪取するのを手助けした）にワンガース爺さんの礼拝用のイスラム寺院建立の監督を命じた。

ワンガース爺さんは長安に住み、その月日が長くなると、故郷が恋しくなった。ワンガース爺さんに付随ってきた唖搖やマンラーズも家に帰ると故郷のことをよく話すようになった。ワンガース爺さんは一日中浮かぬ顔であった。そこで唐王は人に命令して、ワンガース爺さんに金の壺を一つ授け、彼に身を清め、顔を洗わせた。この壺は“唐瓶”[9]と呼ばれ、今でも、回族の各家庭には必ず黄銅製の唐瓶があり、それを“湯瓶”として使っている。それは金と同色であり、黄金色をしており、清潔で、丈夫である。唐王が唐瓶を授けてからはワンガース爺さんは西域に帰りたいとは二度とおもわなかった。

またいくらか月日が経ち、唐王は以下のように考えた。「ワンガース爺さんが率いてきた回族の者たちは皆独身者ばかりで、家庭を持たなければ、やがて滅びてしまい、唐の国には回族の町がなくなり、一大事である。ゆえに回族に夫人を与えるべく大会を設け、回族の者たち自身に選ばせ、気に入ったのがいれば、それを与えよう」と。

それから後、回族は中原に定住し始めた。今でも回族の人々の間ではまだ「回族の旦那、漢族の嫁さん」と言う言い回しがある。

4．「回族と漢族は昔から親戚だ」

唐王李世民[10]が即位してから、気候は順調で、国は泰平で民の暮らしも平安であった。ところがどの年からだったかは定かでないが、首都長安で妖気が現われ始め、辺りは真っ暗になってしまい、太陽と月も定かでなくなり、天と地もはっきり区別ができず、辺境では絶えず戦乱が起こり、庶民の間でも怪しい出来事や奇妙な話が少なからず現れた。白昼にアヒルがガーガーと鳴き、真夜中に雌鳥が鳴き、人心は不安であった。唐朝の大臣達も皆ひそかに驚き、庶民も口々に噂しあい、皆これは不吉な兆しで、天下の大乱でなければ、李王朝が揺れ、王位が安定していないと考えた。唐の太宗もこれには悶悶として悩んだ。

ある日、唐の太宗[11]は宮殿でうたた寝をしていると、夢の中で緑色の長衣に身を包み、頭に白い“ダスダール（ターバン）”を巻いた大男に出会った。ふと見ると、その男は片手に清めの壷（湯瓶）を下げ、もう片方の手の平に李家の宮殿をのせていた。唐王はびっくりして、大声で一声叫ぶと夢から覚めた。その時、体中びっしょり汗をかいていた。

唐王はあれこれと考えてみたが、やはりその夢の中での吉凶禍福が解けなかったので、大臣と文武百官に参内して夢診断するよう命じた。唐朝には徐茂公と呼ばれる、驚くべき機知と絶妙なる計画を立てる軍師がおり、この人は沢山の錦の袋の妙計を指折り数えることができる。見ると、彼は指折り数えて、口の中でブツブツと言葉を唱えている。それから、唐王に対して、「我が王が夢の中で会われた方は西方の聖人なり、我が王がそれを中原に招くこと可能ならば、必ず唐朝の国土を変わらず保つことができる」と言った。そこで唐王は命令を下し、腕利きの

使臣を一人選出し、金銀財宝を持たせて、夢中の賢者を招聘すべく西方へ向かわせた。

この唐朝の使臣と従者達は長安を出て、“シルクロード”に沿って、西域諸国を遍く渡り、アラブのメッカに着いた。唐の使臣達はメッカの国王ハイリシュアイ（アラビヤ語で国王の意）に会って、来意を説明した。メッカ国主ハイリシュアイは唐朝の使臣の来意が切なるものであると見て、3人の弟子を派遣し、それぞれに30人の従者を付けさせた。そして東域に赴かせ唐朝の補佐をさせることに決定した。唐の使者は携えてきた金銀珠宝や絹織物をすべてメッカ国内の人民に分け与えた。一方、ハイリシュアイは唐王の使者の再三の要求に応じて、聖人モハメッドの肖像画を唐王に送ることに同意した。但し一つ条件があり、それはただ見て拝むだけで、触れてはならないというものであった。唐朝の使臣達は十分に満足してメッカ国主に別れを告げて帰った。

メッカ国主ハイリシュアイが派遣した3人の弟子は一番年長をガイスといい、2番目をアイス、3番目をルアンガースといった。数百人もの人が彼らの東行に同行した。途中、一番年長のガイスと2番目のアイスが相次いで病にかかり帰らぬ人となってしまった。まもなく長安に着く時、唐の使臣達はルアンガースを護衛してきたこれらの人々も一同に中原に入ることを要請した。顔立ちから見るに、この数百人の人達は一様に濃い髭をたくわえているが、実際は皆年若いたくましい青年である。彼らは唐の使臣の心からの要請に従った。勿論、すでに長安まで後少しだったので、帰らないほうが良いとも思った。そこで、ルアンガースに随行して中原に入り唐朝を守ることを希望する旨を表した。こうして、この数百人の人達はルアンガースに随って堂々と長安の町に入城してきた。宮殿内ではすでに宴会の準備を整えて、西方から来た賢客達を歓迎した。

ルアンガース達は長安に到着してから暫くして、天地は一新した。唐王李世民は聖人モハメッドの肖像画を見て、心中大いに喜び、「この人こそまさに私が夢の中でお会いした人だ。我が李家の国土を守ってくださる聖賢であり、我ら君臣は是が非でも祈らなければならない」と言った。その結果、祈りのおかげで肖像画からモハメッドの絵が消えてなくなり、白い紙が一枚残っただけだった。

唐王は直ちにまた命令を発して、護国公尉遅敬徳に九里山上にルアンガース達が礼拝や読経を行うための陝西大寺建立を命じた。

それから後、東の国唐朝では風穏やかで日麗らかになり、五穀豊穣であると同時に家畜は健やかに育ち、唐朝の将軍は人馬強壮で、次から次へ藩王や反乱軍を掃討し、唐朝は再び国威と軍威を振るうことができた。

しかしこの数百人の賢客は言葉も違い、衣服装身具等の風俗も異なるので、月々食料も給料も二倍受け取っているが、やはり生活面で馴染めず、ある者は故郷を懐かしみだし、さらにあるものはメッカに帰ることを提案した。当初唐王は彼らが帰ることを望まず、気付かない振りをしたり、取り合わない振りをしたりした。時が経ち、庶民達も西方から招かれた客人達が帰りたいと騒いでいることを知った。1月1月と延ばし、1年1年をのばしてきたが、今日も明日も帰りたい、帰りたいと騒ぐ。しかし主人は客人を帰さない。こうして、「回、回、回（帰る、帰る、帰る）」と言っている間に回回人と呼び名ができた。

李世民[10]はこれらの回回人を永遠に中原に留めておくために、また文武大臣を召集し、みな

に良い案を出させた。神算軍師徐茂公は早くも心中に成算があり、彼は唐王に対して「彼ら客人を結婚させ、彼らに妻を持たせれば帰ることができなくなる」と言った。唐王はそれを聞いて大喜びしたが、また「媒酌人は誰がするのか？」、「何処の娘がこれら言語の異なる回人に嫁ぎたがるのか？」とも考えた。そこで、徐茂公がまた一計を講じた。唐王はこれを聞いて何度も何度もうなずきながら、「素晴らしい」と言い、即聞き入れた。

ちょうど正月十五日の飾り提灯遊園会の時、唐王は「回人が園遊会に出入するにあたって大小の関所でこの人達を阻止することがないように」とひそかに命令を下した。また内人を通して「回人は自分で遊園会上に配偶者を選んでよい。但し一つ条件があって、髪をたばねて結っている女性は全て選ぶことはできない。なぜなら、それは全て結婚相手のいる若妻である。しかし長いおさげをしているのは全てまだ結婚していない年頃の娘であり、見初めるだけで妻と認められる。また選ばれた相手は事務官によってその夜に朝廷に上申される」という天子の命令を伝達した。

この年の遊園会では、獅子舞、旱船、高下駄を履いた道化師といった民間芸能などがいろいろあり、灯籠松明、花火爆竹と、とても賑やかで、見物人で黒山の人だかりである。娘たちは日頃は家の外に出ないため、まだ回人を見たことがなく、従って遊園会上でこっそりと回人の後を追う者もいる。

次の日、各州の府、県では官僚であろうと庶民であろうと、有力者であろうと金持ちであろうと、回人に娘を見初められた家では全て唐王の命令に従った。その命令とは、すぐに祿部（食料と財政を管理する部門）まで結納の金銀を受け取りにいき、それぞれの家の娘を花嫁用の駕籠に乗せて賢客院まで送り届けろというものであった。この賢客院回人達は見初めた娘を直接確認して受け取る。それぞれが親戚であると認め合い、朝廷が親となり、役所が主催して、笛を吹き、太鼓、銅鑼を叩いて、賑々しく床入りした。

3日目、新婦が新郎を伴って実家に帰る時、役所はやはり安心できず、回人一人一人に使用人を付けて密かに護衛させた。新婦の実家では人々は喜んで新郎新婦をもてなし、新婦方の叔母や姑達、姉と妹達はこっそりと新婦に「回人達はどうであるか？」と尋ねる。娘たちはみなほぼ一様に「人柄もいいし、飲食マナーもいい。ただ言葉が分からないだけだ。」と答えた。唐王は月毎に新婦方の家に食料と給金を与えつづけ、回人もこうして中原に留まったのであった。けれども、回人の習俗と宗教は漢人と異り、今に至ってもやはりそうである。回人は本来姓がなく、その後、彼らの子女は母方の姓を名乗り、言葉も漢人と同化した。従って、回人と漢人は昔からの親戚であるというのである。

以上、三つの民話から我々は今日の回族男子の服飾の起源を知ることができる。回族の男子はダイスダール（ペルシャ語。頭を白い布で覆う）をし、緑色の長衣を身に包む。このような服飾は現在ではほとんどモスコでの阿訇[18]とマンラーズ[19]が着る服飾である。これら以外はまた白い帽子をかぶり、ある地方では白い帽子の上にアラビヤ語で言葉を刺しゅうしてある。回族の男子は白いシャツが大好きである。また、白いシャツのうえに黒色、紺色のチョッキを着ると、色のコントラストがはっきりするので、人に爽やかで、上品な感じを与えてくれる。このチョッキは薄いものと厚いものの二種類があり、季節によって着替える。回族の男子は白い

布で作られた靴下と白いズボンをはく。そして男子は髭をはやす。この髭は宗教の派によって長さが違う。また、回族の男子はナイフを腰につけるのが好きである。一つは服飾として、もう一つは牛とか羊を屠殺するために使う。この習俗は唐の時代にアラビヤから持ち込んだものである。

回族女子の服飾も特徴がある。それも回族民間故事から知ることができる。それを次に紹介しよう。

5.「姑孝行な嫁」

昔、孝行な嫁がいた。旦那はもう亡くなって、家にはただ彼女と姑、二人の未亡人が残っているだげであった。嫁は若かったけれど年老いた姑のために、再婚を望まず、毎日金持ちの家に行って炊事の仕事をして、お金をかせいで姑を養っていた。しかし、稼ぐお金はほんのわずかなので、家の生活はまだ十分でなく、嫁はどうしたものかと思案していた。そして一つの方法を思い付いた。毎日炊事の仕事に行く家から帰るとき、両手に麺をつけて帰った。家に帰ると、手についた麺を鉢で洗った。麺が鉢の底に沈むのを待って、上の水を掬って捨てた。そして、沈殿した麺と少し干麺と一緒にこねて、姑に食事をこしらえて食べさせた。二人はこのようにして何とかその日を過ごしてした。

ある日、嫁は姑にご飯を作り、姑がちょうど食べようとしているときに、外で雷が轟いた。はじめ、二人は気に掛けなかった。しかし、しばらくたって、雷鳴の様子がちょっとおかしいと思った。普通は空が曇って、それから雷が何回か鳴るものだ。しかし、今日は晴れていて、一点の雲もないのにどうしたわけか雷が轟いた。嫁は考えれば考えるほどおかしいと思った。以前、神様が世の人に罪を下す時、ときどき雷に人をとらえさせることがあるということを老人から聞いたことがあった。嫁は自分がいつも両手に麺をつけて持って帰っていたことを思い出した。教門の教えから見れば、これは罪になる。ひょっとして、そのせいで神様は雷に私を捕えさせるのではないだろうかと思った。ここまで考えて、彼女の胸はどきどきしてきた。彼女は姑を見、思わず大声をあげて泣いた。

姑は彼女が泣くのを見て、何をそんなに悲しむのかわからず、急いで聞いた。

「どうしたの？何を泣いてるの？」

彼女は泣きながら姑に話した。

「母さん、私は人がくれたのでもないものを持って帰って、あなたに食べてもらっていた。神様が怒って罰を下されたのだ。雷が私をさらって行くのだわ。ホーダ（神様）がもし私の命を召されたら、母さんは体を大切にして下さいね。」

姑はこれを聞いて、嫁を抱き、泣きながらこう言った。

「お前に罪はない。雷がお前を捕らえることなどないよ。」

しかし、姑はまた考えてみた。本当に今日の雷はちょっと鳴り方が違っていると思った。彼女は神様の慈悲が下るように祈った。そして大きな声でこう言った。

ホーダよ、うちの嫁のしたことは全て私のためだったのだ。もし捕らえなければならないのなら、雷に私を捕らえさせてください。」

この時、外の雷の音はますます大きくなった。嫁は姑のことを心配して、急いで外に向かっ

て走り出た。姑は嫁が走り出したのを見て、急いで駆け寄って彼女を押し倒し、嫁の体の上にへばりつき、外に向かって叫んだ。

「ホーダよ、早く雷に私を捕らえさせて下さい。」

嫁は姑の言葉を聞くと、急に両手を伸ばして叫んだ。

「ホーダよ、私の姑はとてもかわいそうな人なのだ……

その言葉が終わらないうちに「ガチャン」という音がして、嫁は自分の腕が重くなったのを感じた。眼をこらしてよく見ると、腕いっぱいに金の腕輪をつけているのだった。雷の音はだんだん聞こえなくなった。

暫く経って、姑と嫁は雷が彼女らを捕らえに来たのではなく、彼女らに福を与えたのだということが分かった。それからというもの、嫁は一層姑に孝行をつくした。姑も一層嫁を可愛がった。彼らは一層仲良く幸せに日を過ごした。

上述の民間故事から、まずなぜ回族の女性が金の指輪をつける習慣を持っているかを知ることができる。回族の女性は指輪やピアスもつける。くすり指に指輪をはめると、既婚だと表明し、小指にはめると、婚約したのを表明し、中指に指輪をはめると、恋人がまだできていないと表明していることになる。ピアスをつける一つの原因はおしゃれのため、もう一つの原因は目のためだそうだ。回族の中に次のような諺がある。「娘の目をよくするにはピアスをつけなさい」。中国漢方医によると耳たぶの真中には目を治療する時のつぼがあるという。

また、「鳳仙花」という花で爪を染める習慣もある。漢の時代、張騫がたびたび西域を往復したことにより、アラビヤと中国に通じる道路ができ、「鳳仙花」もアラビヤから中国に入ってきた。今までも、中国の寧夏、甘粛、青海、陝西では回族女性がまだこの花で爪を染める。

回族女性の服は大体漢民族の女性の服と同じであるが、大きな違いはやはり白帽子と「蓋頭」である。この服飾はアラビヤ国家の影響を受けたものであり、さらにイスラム教「コーラン」の影響も受けている。この服飾習慣は今日まで残っている。回族女性は普通ミニスカートと半ズボンをはかない、袖無しブラウスを着ない、素足にもならない。年配の方は黒色、紺色、グレー色などが好きで、中年と若者は鮮やかな色が好きだ。勿論、今若い女性は大分変わった。しかし一番の特色はやはり白帽子と「蓋頭」[16] である。「蓋頭」の色は三色がある。緑色、黒色、白色である。未婚少女は緑色の「蓋頭」をかぶり、既婚婦人は黒色の「蓋頭」をかぶり、年配の方は白色の「蓋頭」をかぶる。緑のほうが可愛らしく見え、黒のほうが上品で清々しく見え、白のほうが綺麗に見える。回族女性のかぶる「蓋頭」の形も年齢によってそれぞれ違う。年配の方の「蓋頭」は少女や中年婦人のものより長い。

さて、回族服飾の民俗的特色を整理すると以下のようになる。

一、回族の服飾は多方面の作用がある。一つは寒さと暑さを防ぎ、体を守る。二つ目はおしゃれのため。例えば、男子のシャツの上に青いチョッキを着る。女子が爪を染め、服に刺しゅうを付ける。三つ目は宗教的な作用がある。ある回族は宗教活動に参加するため、あるいは宗教の影響を受けたので、ターバンをし、緑色の長衣を着て、「蓋頭」をかぶる。これが回族服飾の民俗的特色となっている。

二、回族の服飾で一番特色を持っているのはやはり装飾品である。昔から今日まで回族の男性

は白い帽子とターバンをかぶり、女性は「蓋頭」をかぶっている。中国の北でも南でも回族さえいればその装飾品の習俗が非常にはっきりわかる。この習俗は漢民族の服飾と著しい対照をなしている。漢民族の服飾の習俗は服に一番の特色を持っている。しかし、装飾品はあまり重要ではなく、あってもなくてもよい。回族は装飾品を重視するため、帽子やターバンや「蓋頭」の生地を非常に気にする。

三、回族は服飾について簡潔を重視し、派手なものをあまり好まない。特に男子の場合は奇抜な服を着ない。服の色は大体白色、緑色、黒色を主としており、これは回族の族源及び宗教とかなり関係がある。イスラム教は黒、白、緑の三色を尊ぶ。中国の史書には「白衣大食」、「黒衣大食」、「緑衣大食」を記載している。「大食」とは古代ペルシャがアラビヤ人に対する呼び方である。今までも、世界諸国のイスラム教徒はこの三色を尊ぶ。

中国の回族は白色を純潔の象徴として見る。イスラム教を創立した後、ムハンマドは教徒に「貴方たちは白色服を着なさい。それは一番よい服だ。」と言った。現実の生活で回族は白色が光を反射することから、暑い夏に白い帽子をかぶり、白色の服を着ることをよしとし、これが回族の服飾の特徴の一つになった。また、回族は緑色服と黒色服をよく着る。回族は緑色が神聖を代表すると見なす。サウジアラビヤのメッカへ行くとき、緑色の旗を持つ。中国のモスコにアーホン（神職者）が“着衣”という儀式を行う時、普通緑色の帽子をかぶり、緑色の長衣を着る。回族の女性は緑色の「蓋頭」をつけ、緑色のズボンをはく時もあるが、黒色の「蓋頭」をつけ、黒色の長衣を着る時もある。この三色は人々の想像を豊かにし、また純真な気持ちを与える。

四、回族は指輪をはめる習俗を持つ。それはアラビヤの風習とイスラム教の影響を受けたものである。アラビヤの女性が婚約する時、結納の贈り物として、適当の金銀装身具を要求する。この習俗は今でもイスラム教の諸国にまだ流行している。指輪をつけるようになったもう一つの原因は古代アラビヤ、ペルシャから中国に来た商人が宝石、金銀装身具の経営を得意にしていたことによる。家族の女性は皆装身具をつける。このことは中国の史書にも記載されている。指輪をつけるようになったもう一つの原因は漢民族の影響を受けたことによる。中国漢民族が指輪をはめる歴史はもう二千年になり、商の時代から始まったようである。以上のことを直接的あるいは間接な原因として回族が装身具をつけることになったと思う。

五、長い歴史の中で、回族の服飾は漢民族の服飾文化から大きな影響を受けた。いま、回族の服飾が漢民族の服飾と異なる点は装飾品、神職者と老人の服飾である。大多数の回族は大体漢民族と全く同じで、特に、都会での若者はおしゃれになった。

回族は服飾において彼らの民族の特色を多少残し続けているが、時代によってかなり大きな変化があった。

以上、中国民間故事から見た回族服飾の特色を簡単に述べてみた。間違っている部分のあることを恐れるが、ご批判、ご教示をいただければ幸いである。

（注）

①回族の民俗風習についての研究は管見の限りでは王正偉氏の「回族民俗学概論」、李樹江氏の「回族民間故事集」などがあり、教えられることが多かった。

②西域から中国に来た人をかつては「蕃客」と呼んでいた。

③モンゴル人のチンギス・ハーンは西方ロシアのモスクワとポーランドまで西征した。

④ターバンは回族の男子が頭に巻いている布である。

⑤⑥日本昔話学会の「昔話－研究と資料」という機関誌に紹介したことがある。

⑦現在の中国河南省洛陽市。

⑧元王朝の隣国「金」(1115年－1234年）で、現在の黒竜江省のあたり。

⑨回族が礼拝を行う前に排泄器官、手、足などを洗う壺のことである。

⑩西暦626年李世民は長安（今の西安）の玄武門で政変をおこした。この政変を「玄武の変」という。

⑪唐の太宗は李世民である。

⑫626年唐朝の王。

⑬⑭阿訇とマンラーズは回教のモスコにの神職者で、阿訇は先生であり、マンラーズは学生である。

⑮回族の女性が頭を隠すスカーフようなものである。